様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ１２２８０

研究課題名（和文）冷戦期日本における文化と移動：在日朝鮮人文学を中心に

研究課題名（英文）Culture and Mobility in Japan's Cold War centering Zainichi Korean Literature

研究代表者
逆井　聡人（Sakasai, Akito）

東京外国語大学・世界言語社会教育センター・講師

研究者番号：５０７９２４０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、アジア太平洋戦争直後の日本及び朝鮮半島における文学者や文学作品を対象に、特に冷戦下の政治状況の中で移動が制限された在日朝鮮人に焦点を当てながら、〈移動〉の表象を考えてきた。本研究の一年目では、研究の基礎となる日本占領及び朝鮮軍政関係資料の収集を行なった。二年目は、在日朝鮮人作家による文学作品の読解を中心に行い、その成果を国外に発表した。さらに、中長期的な国際研究ネットワークを構築できた。最終年度では、covid-19の世界的パンデミックの中でもオンラインミーティングを活用することで、過去二年間に築いた国際的なネットワークを維持することができ、研究成果も発表できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究を通して、冷戦期の日本や朝鮮における文学や文化事象を国際的に議論するネットワークを構築することができた。このことは、冷戦という複数の国家や集団が交渉し相克するような状況に対して議論を国内に留めてしまうことを避けることに繋がり、より多角的な検討が可能になると考える。また、その様なプラットフォームにおいて、文学作品や作家について個別性にとらわれ過ぎない、より理論的な議論ができる様になり、日本文学研究の国際化に寄与することに繋がったと考える。

研究成果の概要（英文）：This research considered writers and literary works in Japan around the immediate post-Asia Pacific War period, especially Zainichi Korean writers and their literature that were severely monitored and censored during the Cold War. In the first year, I collected documents concerning the Occupation of Japan and US Military Government in Korea in university libraries in the United States and Canada. In the second year, I mainly analyzed zainichi Korean literary works and produced several academic papers. In the third (final) year, I utilized online meetings in the situation of the covid-19 global pandemic, in order to sustain the international research network that I built for these three years. The onlinezation of research environment allowed me to present my research outcomes domestically and internationally and also gave a new prospective for future research plan.

研究分野：日本近現代文学

キーワード：戦後文学　冷戦　在日朝鮮人文学　移動

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

【着想の経緯】

申請者（逆井）はこれまで占領期日本の都市表象に注目して研究し、特に国民国家を前提とした「焼跡」的空間イメージに対抗して越境的な「闇市」的空間イメージに可能性を見出した。このような取り組みは、漠然と「戦後」と呼ばれてきた敗戦から現在までの日米同盟を基軸とした歴史認識を相対化し、敗戦後の日本社会を東アジアという領域まで視野に入れて捉えることに繋がった。さらに、2015-2016 の間にハーバード大学で研究を行った際に日本の占領期文化を考えることは冷戦という世界構造を考えることに直結していることに気付かされた。当時の日本発信の文学を冷戦という規模で語り直さなければ、結局のところ国内のみに向けた議論にしかならないことを理解し、現在の世界再編に伴う冷戦文化再考という潮流に置き去りにされないための発話の必要性を強く感じたことがこの研究の着想に繋がった。

【国内外の研究動向と本研究の位置付け】

これまで表象というレベルで在日朝鮮人の移動を扱ったものはあっても、特段「移動」という事象に対して理論化がなされたわけではない。本研究では、在日朝鮮人作家の経験や作品の背景を重要視しつつも、それを事例として取り上げることで最終的にはより理論的な議論へと展開することを目指した。

【研究開始当初の研究環境】

勤務校の東京外国語大学（～2021 年 3 月）では、米谷匡史氏（思想史）をはじめ、李孝徳氏（ポストコロニアル理論）、岩崎稔氏（哲学）、金富子氏（在日朝鮮人運動史、ジェンダー史）といった本研究が理論的前提としている著者たちが身近におり、日常的に研究に関する教示やネットワークを得る機会が豊富にあった。また、これまで申請者は韓国と北米の若手研究者と個別に学術交流を重ねてきており、その日米韓の若手研究者ネットワークを利用できる状況にあった。

米国での資料調査に関しては、2011 年、2015 年の 2 回にわたって公文書館及びハーバード大学で事前調査をしているために、当たるべき資料群の目星はついていたが、同時に新たな資料群を探してもいた。

２．研究の目的

本研究では、初期在日朝鮮人文学における移動の表象を対象とし、その移動の表象自体がいかに国民国家の有り様を変容させる力を持っているか、を検討することを目的とした。この目的を遂行するためにさらに以下の三つの項目を立てた。

(1) 戦後日本文学を冷戦文化というより広い枠組みから捉え直すために、日本のみに限らず東アジア地域を視野に文学作品における移動（displacement）の表象を考察する。より具体的には冷戦初期の日本列島と朝鮮半島間での人々や物資の移動の実態と在日朝鮮人文学者の作品における移動の表象を扱い、またそれに対する米国の取締り政策の政治的または思想的背景を把握する。

(2) 米国という権力の存在がどのように同時代の文学表現を規定していたのかを明らかにし、一方で国家の規制をかいくぐって行なわれた越境的文学活動が、国民国家の規定する空間イメージをいかにして解体するのかを考察する。

(3) 東アジアの文学を事例とした理論を構築することで、冷戦という時代とその文化を問い直す現在の世界的な議論に貢献することを目指す。

３．研究の方法

本研究ではまず①日本占領及び朝鮮軍政関係資料の収集を行なった。従来の歴史研究、殊に日本と韓国それぞれの占領政策研究においては、出入国や貿易に関する制度的な事項は調査され整理されてきたが、その制度の下で人々、特に日本と朝鮮を往来する必要がある者たちがどのような経験をしてきたかという個人的で身体的な過去の記憶についてまで踏み込んだものは、Tessa Morris-Suzuki, *Borderline Japan*(Cambridge University Press, 2010)などの数点の研究を除いてはほとんどなかった。そのため本研究では、日本の GHQ/SCAP と朝鮮軍政下において行われた人的・物的移動に関する規制について改めて整理した上で、その規制を経験した人々の記憶を文学作品や日記、エッセイなどから読み取ることを行なった。

②そのうえで、金達寿や許南麒等の第一世代の在日朝鮮人文学者のテクストにおいて人々の移動がいかに描かれたかを分析した。さらにそうした移動が文学テクスト上に記される際、日本語と朝鮮語という言語及びアイデンティティ選択の問題と検閲という表現上の規制が課せられる。このように移動という行動及びその表象は幾重もの権力の介入を招くものとなるが、同時にその表象それ自体が制度の暴力性を逆照射する起点ともなり得る。本研究では、そうした在日朝鮮人文学を重要視しつつ、人々や物資の移動を媒介することで日本人作家の作品との連動性を見出す。また補完的に米国内の報道なども視野に入れ、日本や朝鮮という空間が米国の一般的な言説の中でいかに表象されていたかを比較検討することも試みた。

さらに、上記①②の作業を進めていく中で得た成果を国内外の学会に、日本語と英語で積極的に発信していった。現在冷戦期の見直しという課題は、東アジアだけではなく、世界的に歴史的再検討が行われているため、国際学会やシンポジウム等の機会を利用して世界の研究者との交流を行っていくことを行なった（③）。

４．研究成果

【2018 年度】

本研究の一年目では、研究の基礎となる日本占領及び朝鮮軍政関係資料の整理、収集を行なった（目的(1)―方法①に該当）。当初の計画では、国立公文書館（NARA)及びハーバード大学イェンチン研究所での調査を検討していたが、事前調査をさらに進めたところ、スタンフォード大学図書館やイースト・アジア図書館、またカナダ・ブリティッシュコロンビア大学図書館の方がより本研究に資する資料群があることが分かり、計画を変更した。

まずスタンフォード大学図書館には日本及び朝鮮半島南部を占領していたアメリカ軍の兵士が個人所有していた写真及び映像資料が多数保管されている。例えばミズーリ出身のウィルキンソン一等兵が撮影した占領期日本の写真集があり、一般市民の生活状況や街の様子などが具に分かる。他にも、占領期朝鮮に赴いた 宣教師団の写真は、宣教師たちと朝鮮の独立運動家との繋がりを示す資料である。またイースト・アジア図書館には、在日朝鮮人運動に関する日本語、英語、朝鮮語の書籍が収集されており、フーバー研究所のデジタル資料と照らし合わせながら調査を行えば、より広範な朝鮮人ディアスポラ研究が可能になることが分かった。

ブリティッシュコロンビア大学図書館では、かつては共産主義者であり、その後日本占領軍に加わり、レッドパージによって占領軍を追い出された後に、朝鮮問題を扱うジャーナリストになったという奇異な経歴を持つデヴィッド・コンデのコレクションが収録されている。その中には、コンデが傍聴した東京裁判の資料や、彼が冷戦期の東アジアについて書く上で作成したメモなどがある。彼が 1966 年に日本で出版した『アメリカー日本 アジアの枢軸』(青木出版)のもとになるものであり、様々な経験を経てきたコンデが見る東アジアの冷戦状況を見る上で重要な資料である。

国内では、詩人許南麒に関する資料収集を開始した（目的（2）―方法②に該当）。

1 年目は北米での資料調査を中心に計画していたため、資料の所在確認及び資料収集という点においては、これまで把握していた所蔵箇所以外で資料群を見つけられたということが大きな成果であった。また、2018 年 6 月にワシントン大学で開催された Trans-Pacific Workshop、2019 年 3 月にブリティッシュコロンビア大学で開催された 3P Conference に参加したことで 2 年目、3 年目に計画していた北米の日本近代文学、朝鮮近代文学研究者とのネットワークづくりが顕著に進んだことも 1 年目の成果である（目的（3）―方法③に該当）。

【2019 年度】

2 年目は、在日朝鮮人作家による文学作品の読解を中心に行い（目的（2）―方法②)、その成果を国外に発表した。当該年度における特に顕著な成果としては、中長期的な国際研究ネットワークを構築できたことである。国際研究ネットワークの構築は申請時の計画でも中核的目標と掲げていたため（目的（3）―方法③)、この目標を達成できたことは、本研究の完遂に向けての大きな前進であると言える。

まず、カリフォルニアを中心としたアメリカ西海岸の日本学研究者のネットワークである Trans-Pacific Workshop のメンバーとなり、2019 年 6 月に UCLA で開催された国際会議のスピンオフ企画として拙著『〈焼跡〉の戦後空間論』(青弓社、2018 年)の書評会が開かれた。この書評会では、自著を紹介する機会を得たとともに、西海岸の若手日本研究者や大学院生たちと議論することができた。ハワイ大学マノア校では、Center for Japanese Studies を拠点とした Empire Studies Initiative に外部協力者として加わることになり、中長期的な協力関係を築くことができた。また北米の若手研究者グループの *Zainichi* Studies Consortium の Board Member として 2019 年 3 月から活動している。国内でも、大阪大学「越境文化研究イニシアティブ」に協力者として加わり、2020 年度も継続して関わることになった。こうした国内外の国際ネットワークを利用して、研究の成果を発表することができ、また今後、中長期的な共同研究を計画することが可能となる場を得ることができた。

また研究成果として研究論文を 4 本発表、国内外の学術会議での発表を 3 回行い、2020 年 2 月以降にコロナウィルスによって中止になったイベントを除いても精力的に研究活動を行ったといえる。当該年度は計画通り、在日朝鮮人文学者、特に金達寿や許南麒に関する調査及び作品の分析を行い、成果を発表した。金達寿に関しては、論文「在日朝鮮人文学と自己検閲―GHQ 検閲と在日朝鮮人コミュニティーの狭間にいる「編集者・金達寿」の葛藤を考える」で議論した。GHQ 検閲下での、金達寿自身の「自己検閲」行為に関して、従来の検閲研究で踏襲されてきた「抑圧者(アメリカ)/被害者(日本)」という二項対立図式を崩した 上で、どのように位置づけることができるかを考察した。許南麒に関しては、田口麻奈氏との共著の論文「IOM 同盟を中心とする街頭ハガキ展、詩歌原稿展および姫路原爆展をめぐる資料の整理と検証」の中で、1950 年代初頭の日本詩壇における許南麒の位置を、新資料とつき合せることで検討した。「考現学と帝国主義――今和次郎の視線について」では、冷戦期ではなく関東大震災前後の 1920 年代における今

和次郎の朝鮮観を論じた。冷戦期の日本の知識人の朝鮮半島認識と 比較することを目的としてこの論考に取り組んだ。

口頭発表では、ハワイ大学にて'Forming Political Identity of the Resident Koreans in Japan; Representations of Legal Status in Zainichi Korean Literature in 1950s'という題で、在日朝鮮人が朝鮮戦争前後においてどのような法的立場に置かれたかについて論じた。また東京大学アメリカ太平洋地域研究センターにて開催された安岡章太郎の渡米経験に関する研究会でコメンテーターを務め、冷戦期における環太平洋の知識人の移動というテーマに関してより理解を深めた。

【2020 年度】

当該年度は、本研究の最終年度であり、本来の計画であれば本研究のまとめとして国際的なシンポジウムを開催する予定であったが、世界的な covid-19 の流行により、そのような大規模な国際研究集会を計画のような形で開催することが不可能になった。しかし、一方ではオンラインミーティングを活用することで、過去二年間に築いた国際的なネットワークを維持することができ、今後の国際的な研究をオンラインも想定しながら進めるうえで役立つような経験を積むことができた。

具体的には、北米の在日朝鮮人文学及び日本近代文学を専門とする若手研究者たちとのネットワーク(*Zainichi* Studies Consortium)では、2020 年 9 月以降、毎月一回のペースでオンライン研究会を開催している。申請者（逆井）は 9 月の回に、拙論「リー『パチンコ』/構造的差別との闘いと翻訳の時差について ： 在日・コロナ・#BLM」(『現代思想』2020 年 9 月）をもとにした報告を行った。このオンライン研究会は現在も継続しており、コロナの状況をみながら今後の国際研究集会を計画している最中である。また、2020 年 8 月 15 日には拙著『〈焼跡〉の戦後空間論』の韓国語訳が韓国で出版された。この韓国語版出版に関するイベントも今後韓国で開催される予定で あり、引き続き韓国の研究者との交流が続く予定である。

以上のような国際研究成果に加えて、国内では論文 2 本発表、国外のオンライン国際学会で 2 回の研究発表を行っている。特に国際学術誌に発表した査読論文「<ポスト・ヒューマン>から抵抗の現場を構想する―許南麒「火縄銃のうた」を例に―」は、〈ポスト・ヒューマン〉という近年の思想的な潮流を取り入れた、より理論的かつ方法論的に新しい読解の実践となっており、本研究の目的であった「東アジアの文学を事例とした理論を構築することで、冷戦という時代とその文化を問い直す現在の世界的な議論に貢献する」(3)ことに、最も接近できた研究成果である。査読や学会発表での専門家からのコメントでも、本研究成果の理論的な新しさについて肯定的なコメントを得ることができた。

【計画の変更について】

本研究の最終的な目標であった国際シンポジウムの開催ということに関しては、2019 年度末の段階から 2021 年の 3 月にハワイ大学にて Empire Studies Initiative と協力しながら「冷戦期日本と東アジアにおける移動」というテーマを含めたイベントを計画していた。またこのシンポジウムでの成果を日本語と英語の両方で論文化し、学術雑誌上で、あるいは論集の中で出版する道を模索していた。しかし、前述したように covid-19 の世界的パンデミックで計画を中止せざるを得なくなり、開催することができなかった。しかしながら、この計画は消滅したわけではなく、引き続き状況を見て開催の可能性を探っていく所存であるため、今後の研究を発展していく際の大きなモチベーションの源となっている。

また、本研究では主にアジア・太平洋戦争終結から 1950 年代前半に照準を当てていたが、今後この冷戦期の文学者の移動の議論を発展させていくには帝国期まで遡って視野に入れなければならないということがより明確に見えてきた。今後の研究につなげるためにも、本研究の裾野を広げることに注力したいと考えている。

経費使用先の変更に関しても言及しておく。COVID-19 の流行により、2020 年 3 月 26-30 日に予定していたアメリカ・ソルトレイクシティ(ユタ大学)での国際学会参加が中止になったために次年度繰り越し分が発生した。繰り越し分は 2020 年度に、自宅作業用のノートパソコンと、オンライン会議用の物品費として使用したことで、オンラインでの研究交流の可能性がより明確になったことをここに記しておく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 逆井聡人	４．巻 47
２．論文標題 考現学と帝国主義ーー今和次郎の視線について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 114-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田口麻奈・逆井聡人	４．巻 24
２．論文標題 IOM同盟を中心とする街頭ハガキ展、詩歌原稿展および姫路原爆展をめぐる資料の整理と検証	５．発行年 2020年
３．雑誌名 都留文科大学大学院紀要	６．最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 逆井聡人	４．巻 22
２．論文標題 応答―「戦後」に捉われない語り方の方へ―〔特集2 書評コロキアム：逆井聡人著『〈焼跡の〉戦後空間論』〕	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Quadrante ： クァドランテ ： 四分儀 ： 地域・文化・位置のための総合雑誌	６．最初と最後の頁 89-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 逆井聡人	４．巻 125
２．論文標題 <ポスト・ヒューマン>から抵抗の現場を構想する―許南麒「火縄銃のうた」を例に―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本學報	６．最初と最後の頁 51-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 逆井聡人	4．巻 48
2．論文標題 ミンジンリー『パチンコ』/構造的差別との闘いと翻訳の時差について ： 在日・コロナ・#BLM	5．発行年 2020年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 150－154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　3件／うち国際学会　9件）

1．発表者名 Akito Sakasai
2．発表標題 Discussion on Postwar Japan
3．学会等名 UCLA Reading Initiative（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Akito Sakasai
2．発表標題 The Image of Illegality: The Political Identity and the Legal Status of Zainichi Koreans in Immediate Postwar Japan
3．学会等名 War and Society in Imperial Japan, University of Hawaii at Manoa（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 逆井聡人
2．発表標題 近代を〈繋留〉する：戦後詩に〈正面〉から向き合うこと：（書評）田口麻奈『〈空白〉の根底――鮎川信夫と日本戦後詩』
3．学会等名 第95回叙述態研究会
4．発表年 2019年

１．発表者名 Akito Sakasai
２．発表標題 Comment on "Yasuoka Shotaro, Nashville 1960, and the Triangulation of History"
３．学会等名 Center for Pacific and American Studies, The University of Tokyo（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Akito Sakasai
２．発表標題 Yakeato as Parody of the Roman Ruins
３．学会等名 Trans-Pacific Workshop Annual Conference, University of Washington（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Akito Sakasai
２．発表標題 From Rubble to Protest: Japan’s Postwar in Literature and Film
３．学会等名 British Association for Japanese Studies（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Akito Sakasai
２．発表標題 Kim Talsu’s Self-Censorship Between His Zainichi Compatriots and American Occupation Power
３．学会等名 3P Conference: Passing, Posing, Persuasion: Cultural Production and Coloniality in Modern Japan（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 逆井聡人
２．発表標題 <ポスト・ヒューマン>から抵抗の現場を構想する―許南麒「火縄銃のうた」を例に―
３．学会等名 韓国日本学会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Akito Sakasai
２．発表標題 Min Jin Lee's Pachinko and Zainichi Literature tradition
３．学会等名 Zainichi Studies Consortium（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 逆井聡人
２．発表標題 ポストヒューマンとポストコロニアル
３．学会等名 清華大学・東京大学合同フォーラム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計3件

１．著者名 金 ヨンロン、尾崎 名津子、十重田 裕一、牧 義之、村山 龍、逆井 聡人	４．発行年 2019年
２．出版社 花鳥社	５．総ページ数 232
３．書名 「言論統制」の近代を問いなおす	

１．著者名 逆井 聡人	４．発行年 2018年
２．出版社 青弓社	５．総ページ数 356
３．書名 〈焼跡〉の戦後空間論	

１．著者名 逆井聡人	４．発行年 2020年
２．出版社 イスプ出版（韓国）	５．総ページ数 336
３．書名 〈焼跡〉の戦後空間論（韓国語）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

東京外国語大学海外事情研究所雑誌『クァドランテ』
http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ifa/publication.html#no22

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 3P Conference: Passing, Posing, Persuasion: Cultural Production and Coloniality in Modern Japan	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関